



TITLE:

<特集論文> 日本における無教会と 社会正義：井藤道子の実践を中心に

AUTHOR(S):

今滝, 憲雄

CITATION:

今滝, 憲雄. <特集論文> 日本における無教会と社会正義：井藤道子の実践を中心に. アジア・キリスト教・多元性 2005, 3: 35-44

ISSUE DATE:

2005-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57690>

RIGHT:

日本における無教会と社会正義⁽¹⁾ - 井藤道子の実践を中心に -

今滝憲雄

はじめに

15年（アジア太平洋）戦争下に非戦平和の言論活動により、東京帝国大学教授の辞職を余儀なくされた無教会キリスト者の矢内原忠雄〔1893 - 1961〕は、その苦難の時代にハンセン病療養所内のキリスト者と交わり続けた⁽²⁾。「国家の理想」は正義と平和の実現であると主張した矢内原は、優生思想に基づく絶対・終身隔離政策で収容されていた彼らにこそ、批判力と真の愛国心を備えた「日本国民の代表者」としての希望を見出していたのであった⁽³⁾。

そしてその彼の精神を受け継ぎ、療養所内のエクレシアを慕ってハンセン病療養所の看護婦として働いた人物が井藤道子〔1917 - 〕である⁽⁴⁾。本稿は、矢内原に「私の娘のように親しい者」と語られ⁽⁵⁾、現在も鹿児島県鹿屋市にある星塚敬愛園キリスト教恵生教会の会員として、ハンセン病と共に生き在園者と交流を続けている彼女の生き方を検証する。そのことを通じて、無教会の実践が社会正義を実現し、平和を作り出している事実を究明したい。

(1) 本稿は、2005年3月29日発表の第19回国際宗教学宗教史会議世界大会（IAHR東京大会）での同名パネル報告の原案を論文化したものである。

(2) 15年（アジア太平洋）戦争下における矢内原の信仰と実践に関しては、拙論「矢内原忠雄の預言者的精神と平和思想 - 絶対矛盾的自己同一をモチーフにして」『アジア・キリスト教・多元性』第2号、2004年3月、67 - 96頁参照。

(3) 矢内原とハンセン病者との関わりについては、井藤道子・野谷憲三編『野菊 - 矢内原忠雄先生とらい療養所』野菊刊行会、1965年、及び拙論「無教会キリスト者による平和を創造する愛の実践について - 青木恵哉の『無抵抗の抵抗』の宗教的精神と行動との関連において」庭野平和財団編集発行『平成11年度研究・活動助成報告集』2001年3月、30 - 35頁参照。

(4) 井藤道子『星塚敬愛園と私』野の花通信社、1997年参照。また井藤が憧れ、その群れの中へ導き入れられたいと願った大島青松園のエクレシア・キリスト教霊交会と、彼女にハンセン病療養所を最初に案内した霊交会初代会長の三宅清泉や世界的な詩人長田穂波の生涯に関しては、土谷勉『癡院創世』（再版）キリスト教大島霊交会、1994年参照。

(5) 矢内原忠雄「愛について」『矢内原忠雄全集 第23巻』岩波書店、1965年、459頁。なお、本講演記録は1957年1月19日に当時東大総長であった矢内原が、沖縄のハンセン病療養所愛楽園で行ったものであるが、本園と井藤との関係について触れておくと、彼女が最初に赴任した星塚敬愛園は1935年10月28日に創設された国立療養所で、開園と同時に九州各県に門戸を開いた。しかし「本土」での患者収容は思うように行かず、当時申し込みの殺到した沖縄及び大島諸島からの収容に踏み切り、その結果当地出身の人々が入所者の多数を占めた。が、敗戦で沖縄玉砕の報に接し、故郷の肉親と断絶状態となった当地出身の人々は望郷の念を強く抱く一方、アメリカ統治下での園の再建を期待し、愛楽園への転園帰還願書をマッカーサー司令部に提出した。そ

1 無教会の信仰の継承

井藤道子は少女時代にイエス・キリストのことばと出合ってから以来、キリスト教とは無縁と言える環境の中で一人聖書を学び祈りつつ信仰を深めた人物で、1941（昭和16）年に鹿児島県の大隅半島にある国立療養所星塚敬愛園の看護婦としての道が開け、それから終始看護婦としての思いを抱きハンセン病と共に歩んできたキリスト者である⁽⁶⁾。無教会キリスト者の矢内原忠雄を師と仰ぎ、また逆に彼に影響を及ぼし返した人物の一人であると言える⁽⁷⁾。その彼女に、長い間解決し得ない信仰上の問題があった。罪の問題である。そして罪の悔い改めを経ずに歩んできた彼女に、その存在を自覚させる契機を与えたのが矢内原であった。

「あなたが「罪」という事に苦しまずして、イエスの愛に居りイエスと偕に生きる信仰を恵まれたことは本当に幸福な事です。パウロはきっとあなたを羨むでしょう。（中略）併しすべての人があなたと同一の経験を恵まれるものではありません。」⁽⁸⁾

これは星塚日記と名付けられた井藤の日記を手にした矢内原が、1945（昭和20）年2月9日の夜に書き綴った手紙からの引用である。そこには前年5月の矢内原の星塚訪問時と同年8月末の山中湖畔での出会いから受けた印象が、日記によって具体化された事実が語られており、イエスとの霊交に生きる彼女の心の美しさへの愛に溢れた感想が寄せられている。と同時に、この日記を一貫して流れている彼女の疑問に対する次のような返事もなされている。

「パウロはイエスとの完全なる霊交に自分が入ることを妨げるある力が、自分の中にある事を知って苦しみました。それが「罪」であります。而して苦しんだ結果、この「罪」はパウロ自身の力でどうにもならず、ただキリストの十字架を信ずることによってのみ、キリストの十字架の力によってのみ、除かれるものである事をば、キリストに在る神の憐憫によって示されました。」⁽⁹⁾

してその許可を得て1947年5月10日、各療養所から希望者を募り、愛楽園への患者の大移動がなされた。その際井藤は敬愛園からの付添いとして、彼らと共に沖縄へ渡った。沖縄上陸後は廃墟からの復興ままたない園に留まり、現地米軍の特別許可を得て過労と栄養障害で倒れるまでの6年間を屋我地島で過ごした。その間「本土」からの書籍購入の道は途絶えており、活字に飢え要求を満たし得なかった人々に矢内原の個人雑誌『嘉信』等をもたらした。更に入園者への短歌指導や木曜会と呼ばれるキリスト教集会への貢献等、文化面でも活躍を見せた。このようにして彼女は、15年戦争で国内唯一の住民を巻き込んだ地上戦により犠牲となった沖縄及び愛楽園に対して、その罪を償い続けたのである（井藤道子『祈りの丘』103 - 123頁。祈りの家教会聖堂30周年記念誌編集委員会『祈りの家教会聖堂30周年記念誌』日本聖公会沖縄教区祈りの家教会、1984年所収の松岡和夫伝道師執筆による「木曜会」73 - 75頁、及び「井藤道子さんと木曜会館」42 - 43頁参照）。

(6) 井藤道子『祈りの丘』新地書房、1987年、1 - 169頁、及び「霊交を慕って」星塚敬愛園キリスト教恵生教会編集発行『恵みに生かされて』1986年、158 - 175頁参照。

(7) 井藤道子『星塚随想集』野の花通信社、2001年、169 - 195頁参照。

(8) 矢内原忠雄書簡 井藤道子宛 1945年2月9日『矢内原忠雄全集 第29巻』岩波書店、1965年、287 - 288頁（井藤道子『祈りの丘』62頁にも引用）。

これは罪の懺悔が理解出来ず、その問題に苦しむことを疑問視していた彼女に矢内原が説いて聞かせた箇所であるが、彼女は当時どのキリスト者もが苦しむという罪の問題を「おとなの世界のこと」と言い、自分は幼き者のごとく素直にイエスのことばを信じて歩みさえすればよいと考えていた。よって“我が欲する善はこれを為さず、反って欲せざる悪はこれを為すなり”という心の苦しみ、苦しい生活そのものである罪に悩む者に憐れみを持たなかった彼女に、矢内原は信仰の道程の多様性を説いている。イエスの愛を知る道は議論すべき問題ではなく、各人の性格や体験や必要によって異なる。ただ明白にすべき点は信仰は最後まで持ち続けなければ信仰ではないことだ、と。更に翌日彼は、再びペンを取って彼女に手紙を書き送った。その中で罪を概念的に考え罪に悩む者を「傲慢」と評した彼女を大いなる認識不足と指摘し、そのように互いが冷たく批評し合うことから、イエスの愛であるべきキリスト教の中に忌むべき争闘と流血が見られるようになったと述べている。また自己の経験を一般化し他人を審く冷たい心と、信仰を狭く限定することの危険性についても指摘している。

「あなたにはあなたの純な信仰の世界を神が御与え下さいました。それを失わずにお進みなさい。而して他日若し神があなたに「罪」のあがないについての信仰の目をも、あなたの今与えられている信仰の世界に加えて、お開き下さるならば、それだけあなたの人生は豊富になり、神の智慧と愛に対するあなたの感謝は大きくなるのです。」⁽¹⁰⁾

矢内原からこの2通の書簡が送られて以来、彼女はそれを何度も繰り返し熟読しては祈り、祈っては読み返す日々を過ごした。また彼女が祈る眼前の壁には、子羊を抱くイエス像の額と、フィリピの信徒への手紙における次のような聖句が書き記された色紙が掛けられていた。

汝キリスト・イエスの心を心とせよ 彼は己を卑して死に
至るまで 十字架の死に至るまで順い給へり（フィリ 2:8）

この聖句をひたすら念じて祈り続けたある朝、十字架上で捧げられたイエスの祈りの声が彼女の心に響いた。「父よ、彼らを赦し給え、そのなす所を知らざればなり」（ルカ 23:34）。その瞬間、眼からうろこが落ちる思いで彼女は罪の自覚に達した。罪を知らなかったことが、今までその実体を見極められなかったことが自分の罪であり、それは死に値するものだった、と。そして罪の啓示を受けた彼女は、その贖いを実践するために空襲下の旅を決断する⁽¹¹⁾。

2 聖霊の導きによる上京

「天地を創造し、歴史を支配し給う主なる神、我に命じて言い給う。「汝恐るるなかれ、おののくなかれ、われ汝に命ぜしにあらずや。汝行きて近衛文麿に告げよ」と。近衛文麿よ、汝

(9) 同上、287頁（同上、61 - 62頁にも引用）。

(10) 同上、290頁（同上、67頁にも引用）。

(11) 井藤道子『祈りの丘』69 - 70頁参照。

は汝の生命をもって、天皇に申し上ぐべし。「陛下は、御生命をもて日本を平和に還し給え。大和は国のまほろば たたなづく青垣山 こまれる大和しうるわし。うるわしの国、大和の国に還し給え。しかして皇子明仁親王によき師を迎え、速かに神の書聖書の真理を、学ばしむべし。これ日本の国をあわれむ神の愛、神の言なり」と。」⁽¹²⁾

井藤がこの「細き静かなるみ声」を確信し、天皇への戦争終結勧告を行うために空襲下の旅を決行した1945年3月10日、東京は世界戦史上最悪とされる無差別空襲の被害を受けていた⁽¹³⁾。それは日本がこれまで行って来た数限り無い無理非道、満州事変以来の軍部の行動を許し続けて来た日本国民の知的怠慢への大きな代償となったと言えよう⁽¹⁴⁾。神ならぬものを神と仰ぎ「鬼畜米英撃ちて止まん」との軍国主義思想に染まっていた当時、ハンセン病療養所も例外ではなく、園長の指示の下に翼賛体制を敷いていた沖縄愛楽園では1944年10月10日の空襲から米軍上陸までの間に、患者地帯を中心として甚大な施設被害を被った⁽¹⁵⁾。そしてその最大の犠牲者だったのが、ハンセン病を病む少年少女や幼い子どもたちであった。

「何がほんとうでどうすることが一番ただしいかと示されていて、この世と言ういろいろな障害物のため、はばまれておりますと考えると、知っていて出来ない私がほんとうはいちばん悪いようです。」深い鋭敏な魂を持ったくにちゃん、それだけにどんなに偽りの多いおとなの世界を寂しかったか知れない（中略）くにちゃんのこころの隅から隅までみんな知っていて上げて、それでいてこの世をくにちゃんの住みよいところにしてあげる事の出来なかった私、ほんとうにくにちゃんごめんなさい。」⁽¹⁶⁾

井藤が勤める敬愛園の1944年度末の総患者数は1217名で、医師6名、看護婦9名という貧しい

(12) 同上、85 - 86 頁。

(13) 日本の敗戦間際におけるアメリカ軍の空襲は、この1945年3月10日の東京大空襲をもって第2段階に入ったと言われている。すなわち、軍事目標から大大都市への焼夷弾攻撃による市街地爆撃への移行である。太平洋マリアナ諸島の空軍基地から飛来したB 29型戦略爆撃機約300機（第21爆撃軍）による1万3千発の高性能焼夷弾（約2千トン）の夜間攻撃（約2時間半）で推定10万人が犠牲に、また100万人が家を焼失し首都の約40パーセントが焼き払われたとされる。ちなみに3月18日には、天皇がその被災地の視察に訪れている（東京空襲を記録する会編『東京大空襲の記録 復刻版』三省堂、2004年、81 - 130 頁。家永三郎『太平洋戦争 第2版』岩波書店、1986年、249 - 250 頁。色川大吉『ある昭和史 - 自分史の試み』中央公論社、1975年、339 - 340 頁。江口圭一『十五年戦争小史 新版』青木書店、1991年、233 - 234 頁等参照）。

(14) 日本戦没学生記念会編『新版 きけ わだつみのこえ』岩波書店、1995年所収の「木村久夫の手記」445 - 446 頁、及び五十嵐顕『「わだつみのこえ」を聴く - 戦争責任と人間の罪との間』青木書店、1996年の「木村久夫の手記（一）、（二）」72 - 149 頁参照。

(15) 上原信雄編『沖縄救済史』財団法人沖縄らい予防協会、1964年、170 - 174 頁。沖縄愛楽園『開園30周年記念誌』1968年、40 - 42 頁。沖縄タイムス社編集発行『沖縄の証言 上 激動25年誌』1971年、140 - 145 頁。沖縄教育委員会編集発行『沖縄県史 第10巻 各論編9 沖縄戦記録2』1974年、953 - 1002 頁。上原信雄編『阿達の園の秘話 - 平和への証言』上原歯科医院、1983年、75 - 95 頁。沖縄愛楽園入園者自治会『命ひたすら - 療養50年史』1989年、111 - 134 頁等参照。

(16) 井藤道子著、インガオサム編『道子のいのり』三一書店、1953年の「1945年1月9日」及び「同年1月11日」の日記、228 - 229 及び233 頁。

医療体制のもと、翌1945年の1年間に入園者の約13パーセントに当たる143名が亡くなっている⁽¹⁷⁾。そのうちの1人であった松山くには、井藤に見守られながら高熱に喘ぎつつ1つの願いを託して、満16歳と1カ月半という地上での短い生涯を終えている⁽¹⁸⁾。井藤はくのに死の前日、母を恋い求める子どもたちの心、その魂を守り抜くために命がけで戦う決心を固めている⁽¹⁹⁾。神の国と神の義を求める真実一途の生活をする、一切の虚偽虚飾を敵に廻す覚悟で。それは内村、藤井武、矢内原忠雄と続く無教会キリスト者としての態度を継承すること、すなわち全ての真理の敵に対する宣戦布告を行うことを意味していたと言えよう⁽²⁰⁾。よって最大の罪である戦争讃美へと駆り立てられる園の現状、自分の身近に在って愛する子どもたちもが軍国主義思想に掬め捕られて行く中、星塚もまた焼け野原になるのではないかという危惧の念に迫られた彼女は、真実を知らしめるために3月10日の陸軍記念日を出発日と定めて上京準備を開始した⁽²¹⁾。そして「ひたすらに我は祈るを天皇よ御命もて戦争を止めしめ給へ」との思いを、かつての首相であり重臣でもある近衛文麿に伝えに行くという結論に達した彼女は、「恐るるなかれ、おののくなかれ、我汝と共に在り」との主のみ声に励まされて、幼子が目的地へ向かって走り出すような姿勢で東京へと旅立った⁽²²⁾。

3 近衛文麿訪問と受洗

再び生きて星塚へ帰ることを望まぬ決心で、1945年3月10日夕鹿兒島発東京行の夜行列車に乗り込んだ井藤は、空襲の合間を縫うように3月12日午前2時半、埼玉県浦和市の親友宅に辿り着いた⁽²³⁾。翌13日自由が丘の矢内原忠雄を訪ね、上京目的を語った。紹介状も持たずに近衛に会いに来たという彼女に矢内原は驚いたが、善い動機から出た行動と純でひたむきな態度に感心し、引き止めることなくアドバイスを与えた⁽²⁴⁾。その助言から得た書状作成を経て、3月15日荻窪の近衛邸を訪問する直前に、彼女は多磨の藤井武の墓前に祈りを捧げ、近衛の私邸荻外荘に向かった⁽²⁵⁾。が、当時近衛は湯河原の山荘に滞在中で、留守宅で不在を知った彼女は再び浦和に戻り、湯河原経由で鹿屋に戻る準備をし、3月19日早朝近衛の山荘を訪ね直した⁽²⁶⁾。「不思議とも御摂理とも思うなり近衛公縁に陽を浴みます」⁽²⁷⁾。

(17) 井藤道子『星塚敬愛園と私』14頁参照。ちなみに死亡原因の第1位は栄養失調で、平均寿命は32.3歳であったという(2003年11月12日に敬愛園で開かれた第13回ハンセン病検証会議における大迫秀雄の証言「開園10年の流れ」より)。

(18) 松山くに「床の中で」(『春を待つ心』1950年所収) 鶴見俊輔責任編集『ハンセン病文学全集第10巻 児童作品』皓星社、2003年、105 - 107頁、及び井藤道子「あの包み - 『春を待つ心』に寄せて」『星塚随想集』44 - 49頁参照。

(19) 井藤道子著、インガオサム編『道子のいのり』の「1945年1月10日」の日記、231頁。

(20) 矢内原忠雄「真理の敵」『矢内原忠雄全集 第24巻』783 - 789頁、及び「神の国」『同全集 第18巻』647 - 654頁等参照。

(21) 井藤道子『祈りの丘』72 - 73頁。

(22) 同上、74 - 75頁。また井藤の歌集『ただ神と』三一書店、1956年、53頁、及び『野の草』野の花通信社、1994年、38頁参照。

(23) 同上、74 - 76頁。井藤道子「浦和と川越」『星塚随想集』166 - 167頁参照。ちなみに、3月12日には名古屋が、13、14日には大阪が、17日には神戸が大空襲を受けている。

「日本の国を思い、君（天皇）を思う切なる真心から、死を決してはるばると、大隅鹿屋の地から上京して来た者で、上京の時には、お会い頂けるまでは、立ち去らないつもりで参りましたが、上京後、恩師矢内原忠雄先生から、お諭しを頂きましたので、無理強いはいしないで、帰鹿のつもりではありますけれど、5分が10分でよろしゅうございますから、お会い下さって私の陳述をお聞き願いたいと存じます」⁽²⁴⁾

このような自己紹介状を取り次ぎ人に手渡してしばらく後、面会断りの伝言が彼女に伝えられた。が、自分の話下手を自覚させられていた彼女は、神からの啓示が記された目的の書状を再び取り次ぎの婦人に渡し、詳しい事情は後日手紙で説明したい旨を伝言として依頼し、その婦人に住所を記してもらい山荘を後にした⁽²⁵⁾。そしてその日の夕方に開通した東海道線で大空襲による火の海の中の名古屋、「おもちゃ箱をひっくり返したような状態」の大阪、神戸の惨状を目の当たりにしつつ、無事帰園を果たした⁽²⁶⁾。それから後、矢内原の個人雑誌『嘉信』や手紙を近衛宛に送付し、戦争終結と聖書の真理に聴き従うことを期待した⁽²⁷⁾。

主のみ声に従い、み手にすがり、導かれ守られての旅を終えた彼女は、その年の復活節の4月1日早朝、敬愛園内楓公園池のほとりの芝生にひざまずき、生ける神イエスの前で祈り、「これから後の命は主イエスのもの」との自覚を新たにしている⁽²⁸⁾。火の海を越えて再び星塚の子どもたちとの再会を許され、看護婦としての白衣生活を送れるようになったことへの感謝と喜び、神の智慧と愛の深さの限りなさを悟らされて。「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼（バプテスマ）をお授けになる」（ルカ 3:16）。また上京決心の糸口、すなわち受洗という回心的道程への導き手となった矢内原の書簡中の一節、その「罪」のあがないの言葉を思い起こし、彼女の心は感謝に溢れている。後年、彼女は次のように述懐している。

(24) 同上、76 - 80 頁。井藤はその日、矢内原から受けた注意と示唆を次のように鮮明に記憶している。「井藤さんは子供のような人だね。子供の話を聞いていると、よく飛躍して、捕えどころのない事を言うが、井藤さんの話も子供が語るような話振りなので、私にもよく分からないところがあるが、近衛さんに会いに行くって、たれかの紹介状でも持っているのかね。紹介状がないと、ああいう人は会ってくれないのだよ、会わないと言って断られたら、どうしても会おうのだなと考えると、素直に鹿児島へ帰るんだよ、無理強いをすると神様に叱られるかも知れないからね。女の人は信仰熱心の余り、狂信的になることがあるから、気をつけないといけないよ - 」「井藤さんは、お話すよりも、文章を書くほうが上手だね、書いたものを読むと、井藤さんの気持ちがよく伝わってくるよ。去年5月私が星塚を訪ねた時の紀行文を、私も書いたら中学生の報告文のようで、井藤さんの日記文のほうが、ずっと生き生きと記されていて上手だよ - 」（矢内原忠雄書簡 井藤道子宛 1945年5月17日『矢内原忠雄全集 第29巻』296頁参照）。

(25) 同上、80 - 82 頁。ちなみにこの荻外荘における荻窪会谈（1940年7月19日）で、第2次組閣の大命を受けた近衛と東条英機ら陸海外相予定者は、八紘を一字とする肇国の精神に基づく「世界平和」、すなわち皇国を核心とした大東亜の新秩序建設方針を確立した（色川大吉『ある昭和史』311 - 312頁。江口圭一『十五年戦争小史新版』148頁参照）。

(26) 同上、82 - 83 頁。

(27) 同上、83 頁。『ただ神と』54 頁、及び『野の草』39 頁参照。ちなみに井藤が湯河原山荘に到着した際、近衛は南陽の射すサンルームで1人うつ伏せて日光浴をしていたという。

「クリスチャンとしての自覚を確立するために、矢内原忠雄先生は、私にとって、なくてはならない存在であり、イエスさまは私をキリストの者とするために、矢内原先生を私の前にお備え下さった（中略）先生は、「事を決するときにはいつも、イエスさまならどうなさるだろうと考え、祈ってから決めるといい。」とおっしゃって下さいましたが、その後の私の信仰生活途上で、そのおことばに従って行動を決する時、人からは理解されず、誤った評を受けて悲しむことがございましたが、しかしその都度、誰が理解してくれなくても、「イエスさまと矢内原忠雄先生だけは、私の心を知り、解ってくださる」という思いに支えられ、励まされ、慰めを与えられて歩んでまいりました。」⁽³³⁾

4 敗戦と現代の宗教改革

1945年8月15日、彼女にとって祈りに祈り、待ちに待った戦争が終結した。その夏、彼女に示された聖書の言葉はイザヤ書40章1節から11節、すなわち第2イザヤの「苦役の民への慰め」の言葉であった⁽³⁴⁾。その感動を書き綴った手紙を彼女は矢内原に送ったが、彼は個人雑誌『嘉信』同年10月号で「時期尚早」と題する短文を記し、その中で「我が国は之より数年若しくは数十年の苦難・屈辱の時を経なければならぬ」と断言した⁽³⁵⁾。しかしその一方で、キリストの福音を受け入れ神観を純化し、霊的信仰に覚醒するならば、真の平和国家として復興するとも述べている。では、矢内原の言う「神観の純化」とはいかなるものか。

戦後復職し社会科学研究所、経済学部、教養学部長等の要職を歴任した矢内原は、1951年12月戦後2代目の東大総長に就任したが、その2期目の任期満了を間近に控えた1957年11月3日、横浜海員会館で開かれた講演会で「現代の宗教改革は何か」と題する講演を行い、その中で無教会

(28) 同上、84頁。

(29) 同上、84 - 86頁。

(30) 同上、86 - 88頁。『ただ神と』55頁、及び『野の草』40 - 41頁参照。

(31) 同上、86頁。なお井藤が近衛に『嘉信』を送付していることを知った矢内原は、次のような手紙を彼女に送っている。「あなたは近衛公に嘉信を送付せられて居る模様ですが、それは今後止めて下さるよう願います。（中略）公に嘉信を送るのは豚に真珠を投げ与えるようなものです。公の為に何の益をも為さず、私の為には有害な結果を生ずるおそれがあります。嘗て私を大学より追うた人々は公の保護を受けた人々や公の部下でありまして、その人々は公の推薦により現内閣に於いても枢要の地位を占めて居ります。公は嘉信を読むに値しない人物であります。（中略）あなたが公に対して抱いて居られる期待は、正直に申しますと、空虚なものであります。公の政治家としての行動や私生活について、おそらくあなたは何もお知りでなく、ただ何となく公はわけのわかった人物のように思っているのではありませんか。人にたよるのは空しい事です。日本の国の救は近衛公によっては決して来りません。ただ神によりたのみつつ、自分は自分の周囲の人々のために最善を尽くすのがよろしい。（中略）私は世の支配階級や貴族階級に容れられる者ではありません。彼らに知られずに居ることが、私の生存と仕事との為めに一番幸福であります。」（矢内原忠雄書簡 井藤道子宛 1945年5月17日『矢内原忠雄全集 第29巻』295 - 296頁）ちなみに、国を救う人物として「試験済み」で「落第」であると矢内原に批判された近衛は、井藤の訪問に先立つ1945年2月14日に「上奏文」（和紙8枚）を用意して参内し、共産革命を阻止し国体を護持するために戦争終結の方途を講ずべきこと、またそのために肅軍を行い皇道派を起用すべきことを天皇に進言している。それに対して天皇は「もう1度戦果を挙げてからでないと中々話は難しいと思う」と返答したと記録されている（「時局二閣スル重臣奉答録」『木戸幸一関係文書』東京大学出版会、1966年、495 - 498頁。細川護貞『細川日記（下）』（改版）中央公論新社、2002年、359 - 364

の意義を宗教改革の必然性から説き、その現代的特色についてこう語っている。すなわち、宗教本来の生命は制度や神学や儀式や勢力に存するのではなく、霊的な神を信じ、霊と真をもって神と交わるところに存するのであり、それ以外に宗教を純化する道はないのだ、と⁽³⁶⁾。そしてその第一要件を認識し実行するとともに、紛争に対して寛容、憎悪に対して愛、因習に対して生命を強調することが必要だと説いている⁽³⁷⁾。しかし、愛と寛容の思想の必要性を知りながら、その実行を妨げるもの、更に驚くべきことにそれと正反対のものが、自分の心の中に見出されると彼は言う。神を神として崇めず、己の欲を果たそうとする「罪」の問題である。これを回避しては、真に人を救う力を発見することは出来ない、と。

「愛と寛容の人となるためにはどうしても「罪」の問題を処理し解決する必要があるのです。神はキリストの十字架によって私の罪を赦し、神の前に義として下さったということを信ずることによって、私は心に平安を得る。すなわち平和の人となります。」⁽³⁸⁾

神による罪の赦しで神の愛を知り、それによって人を赦せる寛容が、また神がその独子を惜しまずに自分を愛したことを知り、それによって自分の生命を捨てる愛が成り立つ。すなわち、人との和らぎである平和が成り立つのだ、と。よって現代の宗教改革も罪の赦しの福音にさかのぼり、そこから出直して初めて新しい時代に活動出来る人間を作り出せるのであり、無教会もそれを除いては現代の宗教改革としての意味を失うであろう、と⁽³⁹⁾。真の意味の無教会は純福音であり純粋な信仰であるが、純福音は無教会よりも大きい。無教会も人間の主張であり動きである限り、形式的で自己満足的な差別主義に陥る危険性を孕む。が、純福音は神の御霊の活動であり、それは神の経綸に従い神の国を地上に建設するまでは止まない力である。いかに時代が混沌としていても、神の真理が必ず勝利すること、神の御霊は神の国を必ず地上に建設するということ、これが自分の最も強く感じていることだ、と⁽⁴⁰⁾。

頁。矢部貞治編著『近衛文麿 下』近衛文麿伝記編纂刊行会、1952年、528 - 534頁。岡義武『近衛文麿 - 「運命」の政治家』岩波書店〔同新書(青版)826〕、1972年、206 - 209頁等参照)。

(32) 同上、88 - 91頁、及び井藤道子『イエスさま』野の花通信社、1991年、117頁参照。ちなみに、この日はめずらしく空襲のない静かな朝であったが(3月28日に鹿屋市は米機動部隊の艦載機130機による航空設備の爆撃を受けている)、当日米軍は4コ師団を並列して沖縄本島への上陸を開始している。その後の今にまで続く「悲劇と矛盾のかたまり」(矢内原)である沖縄の歴史とその救いの問題については、別の機会に検討を譲りたい。なお星塚での空襲のない静かな朝は4月1日のみで、その後の敗戦に至るまでの壕生活の日々において、井藤は念願であった『内村鑑三全集』の全巻を読了している。

(33) 井藤道子『星塚随想集』177頁。

(34) 同上、103頁、及び『祈りの丘』91 - 92頁。

(35) 同上、103 - 104頁。矢内原忠雄「時期尚早」『嘉信』第8巻第10号、1頁(『矢内原忠雄全集 第17巻』267 - 268頁所収)参照。

(36) 矢内原忠雄「現代の宗教改革は何か」『嘉信』第20巻第12号、6頁(『矢内原忠雄全集 第15巻』449頁所収)、及び「ヨハネによる福音書」4章24節参照。

おわりに

以上我々は神ならぬものを神と崇め、罪に囚われている人々を解放する十字架のイエスと、その愛と寛容の原理を確認して来た。すなわち罪の赦しによるその贖いの実践こそが、無教会における社会正義のための行動の原点であり、平和を成立させる事実である点を見て来た。

ところで、この無教会の純福音を証しする「霊と真をもって神と交わる」ということとは、具体的にどのような内容を指しているのだろうか。この点について、井藤道子からの聞き取り内容を中心に、それを筆者の解釈によってまとめたものを最後に書き記しておきたい⁽⁴¹⁾。

彼女はその著書『イエスさま』で、ヨハネによる福音書4章24節を取り上げ、霊の問題についてこう述べている。イエスは《神は霊であるから、礼拝する者も霊とまことを持って礼拝すべきである》と教えた後、十字架上で死なれたが、やがて復活し聖霊の神となって、私たちの心の中に宿り、私たちの身体を神の宮として清めるようになったのだ、と⁽⁴²⁾。ここには十字架上の死後復活したイエスを「聖霊の神」とし、それが我々の心の中に宿ることによって、罪に囚われた旧き自分が清められる過程が語られている。また別の箇所では、生来の自己中心的な自分の死を経験した者に新しい永遠の生命を与えるのが「聖霊」であり、それによって新生した者は風のように自由な天来の生命が与えられると述べている⁽⁴³⁾。そしてこのような聖霊の働きを彼女自身が経験した事実として、次のような出来事を挙げている。それは1961年12月27日、東京女子学院講堂で行われた矢内原の葬儀で、彼女が『嘉信』読者代表として弔辞を述べた時の体験である⁽⁴⁴⁾。彼女の前には友人代表として大内兵衛が、また帝大聖書研究会門下生代表として大塚久雄が弔辞を述べていた。このような「偉い先生方」の後に出て来た彼女は、多数の葬儀参列者の前で臆することなく告別の辞を述べる事が出来た。彼女の顔は、ただ聖国に迎え入れられた矢内原にのみ向けられていたという。彼女は当時を次のように述懐している。「その時、聖霊が語るべきことを語らせてくれた」と⁽⁴⁵⁾。

この井藤の経験によるならば、霊と真による神との交わりとは、自我に囚われた旧き自分の「死」の状態、換言すれば「無」の契機を通じて初めてもたらされると考えられよう。ちなみに井

(37) 同上、6 - 7 頁 (同全集、449 - 450 頁)。

(38) 同上、7 頁 (同全集、452 頁)。

(39) 同上、7 - 8 頁 (同全集、452 - 453 頁)。

(40) 同上、8 頁 (同全集、454 - 455 頁)。ちなみに2004年10月9、10日に福岡国際会議場で行われた「無教会全国集会2004・福岡」における閉会の挨拶で、集会の事務局長を務めた松村敬成(福岡聖書研究会)は、当日配られた井藤の『野の花通信』合本の中から、この矢内原の文章の一節を取り出し、キリストの十字架による罪の赦しの福音という無教会の原点を確認し、集会の纏めに代えている(無教会全国集会2004・福岡 準備委員会編集発行『生きるキリストと共に - 無教会全国集会2004・福岡 記録』2004年、69頁参照)。

(41) 井藤からの聞き取りは、2000年5月5日に国立療養所星塚敬愛園内の宿泊施設で行ったもので、その文責は筆者にある。

(42) 井藤道子『イエスさま』39頁。

(43) 同上、41頁。

(44) 井藤道子「弔辞」清き岸べに刊行会編『清き岸べに』嘉信社、1962年、83 - 85頁参照。

(45) 2000年5月5日に行われた井藤からの聞き取りによる。

藤は、筆者との対話でこう語っている。「思うこと」と「言うこと」と「すること」を一致させるのが真(まこと)の意味であり、それを実現するときに働いているのが聖霊だ、と⁽⁴⁶⁾。つまり「聖霊」によって愛を表現(presentation)された自己が、その表現に応じた隣人愛を自己表現(self-expression)することで、その形となった愛の表現に規定されて、再び「聖霊」に対する(representation)形で実践に踏み出すことになるのではないかと。それはまた、次のような神と人間との関係を意味しているのではないかと。すなわち「神と人間との関係は何処までも自己否定的に自己自身を表現するものと、表現せられて自己表現的にこれに対するものとの関係において理解せられなければならない」という関係を⁽⁴⁷⁾。彼女は前述の著書の中で「(神が)自己否定的に自己自身を表現する」出来事であるケノーシス(フィリ 2:7)の箇所を2度引用しているが⁽⁴⁸⁾、この自己空化の事実こそが無教会の実践の原理であり、よって最後に次のような問題提起を行って考察を終えたい。すなわちキリスト教における霊と真によって神と交わる場所、それが絶対無の場所ではないかと⁽⁴⁹⁾。

参考文献 井藤道子編著発行『野の花通信』(1 - 30号)1981 - 1997年。

〔付記〕本稿は、2000年7月31日に大阪府立大学人間文化学研究科より授与された学位(学術博士)論文「矢内原忠雄における信仰と実践をめぐる問題 - 西田幾多郎の「宗教論」を介して」(未刊行)の第三部第2章第3節以下を大幅に書き改め、加筆したものであることを付記致したい。

(いまたき・のりお 大阪電気通信大学・近畿大学生物理工学部非常勤講師)

(46) 同上。

(47) 西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」『西田幾多郎全集 第11巻』岩波書店、1965年、439頁、及び上田閑照編『西田幾多郎哲学論集』岩波文庫、1989年、371頁、及び松丸壽雄編『西田哲学選集 第3巻』燈影社、1998年、396頁。なお無教会と西田哲学との関係性については、拙論「無教会の『無』の論理と西田幾多郎の宗教哲学 - 絶対矛盾的自己同一をめぐる」『アジア・キリスト教・多元性』創刊号、2003年3月、19 - 43頁参照。

(48) 井藤道子『イエスさま』12、50頁参照。

(49) ちなみに井藤の『道子のいのり』の中には、西田哲学に関する次のような記述が見られる。「[1941年 - 筆者注]6月14日 土曜日 曇後雨...この間鹿児島で求めて帰った、西田先生の哲学についての書を、やっと夜の暇に少し読む。西田先生のような方の考え方を私は好き。無理がなくて自然で、神のみこころにそう思いを感じる。罪というものに対する思いも、この先生は私の思う気持ちにそのような言葉で説いて下さっている。折をみて原著を読みたい、とねがう。ほんとうに私は物をしんから知りたいとねがう気持ちを自分でもどうすることも出来ないくらい感じる折がある。「求めよ、さらば与えられん」という言葉をしみじみ思う。そしてその求めるということすら神が与えんがためのもの、わが思いにあらずして、おのずからなる思いである、と感じる折、神の摂理のいみじさを思わされる。西田先生、西田哲学を産んだ日本というものの生命を思うとき、心おどる思いを感じる。今の世界の混沌からきっと新しい文化というものが産れて来ると信じる。それはあの黙示録のような世界、ほんとうにキリストが世界に臨む日である。主よ、来り給え、と切に切に祈る。」(同書、15 - 16頁)